

熱による皮膚や粘膜の外傷「やけど」

監修：帝京大学医学部附属溝口病院 皮膚科科長 清 佳浩 先生

やけどとは？

やけどは、医学専門用語では「熱傷」といい、熱による皮膚や粘膜の外傷のことを指します。高温の物質が皮膚に一定時間以上接するとやけどの状態になりますが、40～55 度くらいのそれほど高い温度ではないものでも、やけどになる場合もあります。

やけどは、その直後から皮膚に赤みや腫れが出てきますが、その後も腫れや水疱（水ぶくれ）が数日間進行します。やけどは、その深さによりⅠ度熱傷からⅢ度熱傷までに分類され、その程度により、治る時間も治った後の傷跡も大きく異なります。そのため、早い時期に皮膚科専門医を受診し、適切な治療を受けることが重要です。小さく浅いやけどの場合は、医師の指導の下、家庭でもある程度の治療はできます。Ⅱ度以上の場合は、やけどをしたあと 7～10 日間くらいは、毎日医師の診察を受け、それ以降も 2、3 日ごとに診察を受けましょう。その期間で治らない場合は、入院して治療を受けた方がよいケースもあります。範囲や部位によっても異なりますが、1～2 か月以上の入院と外来通院が必要となる場合もあります。

やけどの重症度と症状

皮膚は、外側から順に表皮、真皮、皮下組織の層状の構造をしています。それらの中に血管、リンパ管、皮脂腺、汗腺などがあり、互いに関わり合いながら機能しています。やけどの深度分類とその症状は以下の通りです。

■Ⅰ度熱傷

表皮熱傷（皮膚の表面だけのやけど）ともよ

ばれ、やけどをした部位に赤みがある状態です。2、3 日で治り、傷跡が残ることはほとんどありません。

■浅達性Ⅱ度熱傷

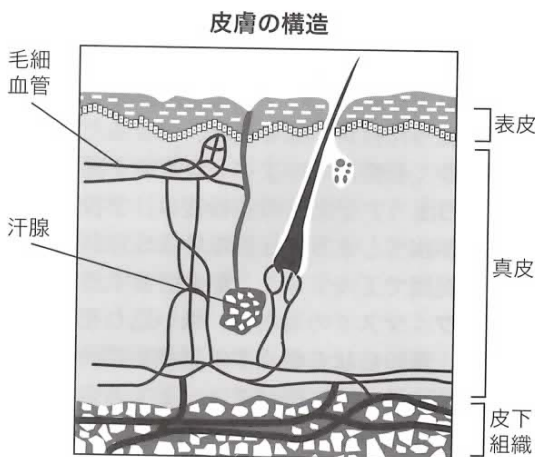
水疱が破れると、傷（潰瘍）になりますが、医師の治療を受けると、通常は 1～2 週間で治り、傷跡を残さないことが多いやけどです。

■深達性Ⅱ度熱傷

適切な治療を受けても、治るのに 1 か月以上かかり傷跡や瘢痕拘縮（ひきつれ）を残すことが多いやけどです。

■Ⅲ度熱傷

皮膚のすべての層が熱による傷害を受けます。自然治癒には非常に時間がかかるため、基本的に入院し、植皮術などの外科的治療が必要になります。



常温でも起こる化学熱傷

やけどは、原因物が高温でなくても起こる場合があります。そのひとつが化学熱傷で、化学物質に皮膚が接触することにより起こります。

原因となる物質の熱作用などが引き起こるものがあります。化学薬品（消毒薬など）の誤使用があります。症状は、長時間によって腫れたり、皮膚の潰瘍で見られることもあります。熱傷より行することか

重症に

低温やけどしなくても長時間、直接症状です。冬、寒いまま就寝してやけどの状態に注意が必要で、軽い症状で皮膚の内化してしまう。予防のため、体の同じ場所、就寝前に湯たスイッチを切り、口は直接皮膚から使用します。やゲーム機などの機器からともあります。器を使用する